

『化物太平記』

タイトルに「太平記」とあるが、内容は当時大ヒットした武内確斎の読本『絵本太閤記』のパロディとなっている。豊臣秀吉の生涯を描いた「太閤記」を化物の世界に置き換え、秀吉は小蛇、織田信長はなめくじにと、三すくみの関係となっている。その他にも、蜂須賀小六は河童に、前田利家は猫又になっており、それぞれを特徴づけるエピソードも妖怪話へと翻案されている。例えば、元の『絵本太閤記』では、蜂須賀小六は秀吉の知恵を試すために、自分の刀を盗むように命じるが、ここでは河童の蜂須賀小六は自分の尻子玉を盗むように命じている。尻子玉とは、人間の生き胆のようなもので、河童の大好物とされている想像上の物である。河童は泳いでいる人の尻子玉を抜いて食べる。食べられた人は死んでしまうと考えられていた。ここでは、人間の尻子玉を取るはずの河童が、逆に自分の尻子玉を抜かれてしまい悔しがる姿が滑稽に描かれている。また、前田利家は筭(こうがい: 男性が刀の鞘にさしておく整髪用具)を盗んだ犯人を切り捨てて織田信長の怒りに触れる「筭斬り」という事件が有名であるが、猫又の利家も筭を失くし、蛇の秀吉に疑いをかけている。

『東海同中膝栗毛』を書いた一九は、日本初のプロの作家と言われている。エリート武士の黄表紙作者と違って、生活を原稿料に頼った一九は、そのため流行にも敏感で、当時流行っていた「化物」と「太閤記」の2つを組み合わせた。この他にも『化物忠臣蔵』などの作品を物している。しかし、この作品は幕府の怒りを買って、版元への処罰と共に一九も手鎖50日に処せられた。幕府にとって、戦国時代の武将たちを滑稽な化物に見立てたこと自体好ましくなかったのだろうが、直接の理由としては絵の中に武将の紋所を描いたことが特に問題になったようだ。化物たちの名前は物語の中では語られていないが、秀吉の桐紋、信長の木瓜紋、蜂須賀小六の卍紋が衣装や幔幕に描かれている。

- ・へび 豊臣秀吉 太閤桐
- ・河童 蜂須賀小六(正勝) 刀を盗ませる→尻子玉 家紋 丸に卍→卍柄の服
- ・なめくじ 織田信長 織田木瓜
- ・猫又 前田利家 筭(こうがい)斬り

[参考文献]

江戸滑稽化物尽くし / アダム・カバット著: 講談社, 2003.3 913.57/かば

2003104383